

Share 金沢の設計理念・手法とその評価

－「ごちゃまぜ」理論に基づいた地域コミュニティ再生－

Design Philosophy and Method for ShareKanazawa and its Evaluation.

- Regeneration of regional community based on the “Gochamaze” philosophy -

○松尾信一郎*1, 西川英治*2

MATSUO Shinichiro, NISHIKAWA Eiji,

“Gochamaze” philosophy is the scheme that all people have a role and play an active part by gathering various facilities and people. Share Kanazawa is the initiatives to regenerate local communities based on this philosophy. In this paper, by presenting the design intention and process of completion of Share Kanazawa we objectively showed the design method and philosophy for realizing the “Gochamaze” regional revitalization.

キーワード：ごちゃまぜ理論、日本版 CCRC、地域コミュニティ再生、パタン・ランゲージ

Keywords: “Gochamaze” theory, Japanese CCRC, Regeneration of regional community, Pattern language.

1. 本論の目的

本論は我々が設計監理に携わった Share 金沢の計画論をまとめたものである。Share 金沢は 2014 年（平成 26 年）に発表された「生涯活躍のまち（日本版 CCRC）」構想において参考とされた取組事例の一つであり、その後も地方創生モデル事業として知られている。¹⁾

しかしながら事業主である社会福祉法人佛子園（以下、佛子園）は雄谷良成理事長が監修する「ソーシャルインベーション」²⁾ で書かれている通り、Share 金沢が開設に至った道筋のスタートラインは園舎として 1966 年（昭和 41 年）に建設した法人本部の知的障害児入所施設が老朽化し、更新の時期を迎えていたことにある。

計画当初から佛子園も我々も現在の Share 金沢の姿が見えていた訳ではなく、互いに暗中模索の中、試行錯誤の議論の上でたどり着いた計画である。

本論は今日まで縦割り型行政の日本社会で実践し得なかった高齢者福祉、障がい者福祉を含めた多様な機能の集合体である Share 金沢の街づくりの設計・計画に関する提案的实践報告であり、設計意図と完成に至るまでの計画の変遷を記している。

2. 計画の背景

2-1. 運営法人のコンセプト

「ごちゃまぜ」と「私がつくる街」

本施設の計画論の考え方を端的に表しているのが「ごちゃまぜ」という言葉である。この考えはまだ成熟した議論はされておらず、学術的な定義はなされていないが、一般にソーシャルインクルージョンと同意として捉えられることが多い。しかし、我々は厳密に言えば違った意味合いが付加されていると考える。ソーシャルインクルージョンは「すべての人々を孤独や孤立、排除や摩擦から援護し、健康で文化的な生活の実現につなげるよう社会の構成員として包み支えあう」と定義されるが、ここでいう「包み支えあう」を制度としてではなく心の能動的な働きとして捉えているのが「ごちゃまぜ」といえる。即ち生きとし生ける物すべての人々が混ざり合うことで相互に関わり合いを持つ関係性を創り出し、お互いに刺激し合うことで今まで体験し得なかったような共感性を呼び起こし前向きに生きようとする心の様態を醸成することを目指しているのが「ごちゃまぜ」である。

認知症を患ったおばあちゃんが重度の頸髄損傷の障害を負った少年の食事の世話を生き甲斐とし、佛子園が運営する西園寺に通い詰めることで認知症が改善するとともに少年の首も動くようになった例を雄谷氏から伺った

*1 株式会社 五井建築研究所

*2 株式会社 五井建築研究所、代表取締役

GOI architecture & associates

CEO, GOI architecture & associates

が、実際「ごちゃまぜ」により互いに作用する前向きなベクトルが生まれているのである。

「ごちゃまぜ」を実現する手法として Share 金沢では「私がつくる街」というコンセプトを掲げている。即ち住民の一人ひとりが積極的に街づくりに参加する仕組みを取り入れることで、かつて日本の地域社会で普通に見られたよき住民コミュニティを再生させ、相互に関わり合いを持つ関係性を築くことを目指している。その為に学生住宅の住人はボランティア活動をする事で家賃を減免することや、共同売店をサ高住の入居者が運営するなど細やかな仕組みを導入している。

2-2. 本計画の立地・居住条件

計画地は石川県金沢市。市の中心市街地より約5km離れた南東部郊外に位置し、2005年（平成17年）に廃院となった結核病棟を持つ旧国立病院機構金沢病院の跡地に立地する。2011年（平成23年）に同機構本部から医療法人、福祉法人による活用を売払い条件に公示され、

児童入所施設の建替用地を求めていた佛子園が取得した。

計画地周辺は古くから緑豊かな丘陵地を背景に、田畑と農家によって田園風景を形成してきた。また計画地の道路向かいには金沢刑務所があり、地域住民以外の往来は少ない地域であった。しかしながら1989年（平成元年）から10余年かけて行われた国立大学法人金沢大学の総合移転を契機に、周辺では土地区画整理事業が進められ、居住環境を大きく変化させた。学生等の住宅需要に対する集合住宅や新たに統合された市立小学校の開校に伴って、若年世帯の低層住宅が建設された。また大型ショッピングセンターや飲食店などの店舗が誘致され、新旧の住民が混在する宅地化が現在も進んでいる状況にある。

2-3. 周辺地域との関わり

計画地に縁の無かった佛子園は児童入所施設を計画するにあたり、スタート時から地元の町内会などへ丁寧な説明を繰り返す一方で、地域からも要望や希望をあげてもらった、と先述の「ソーシャルイノベーション」²⁾で

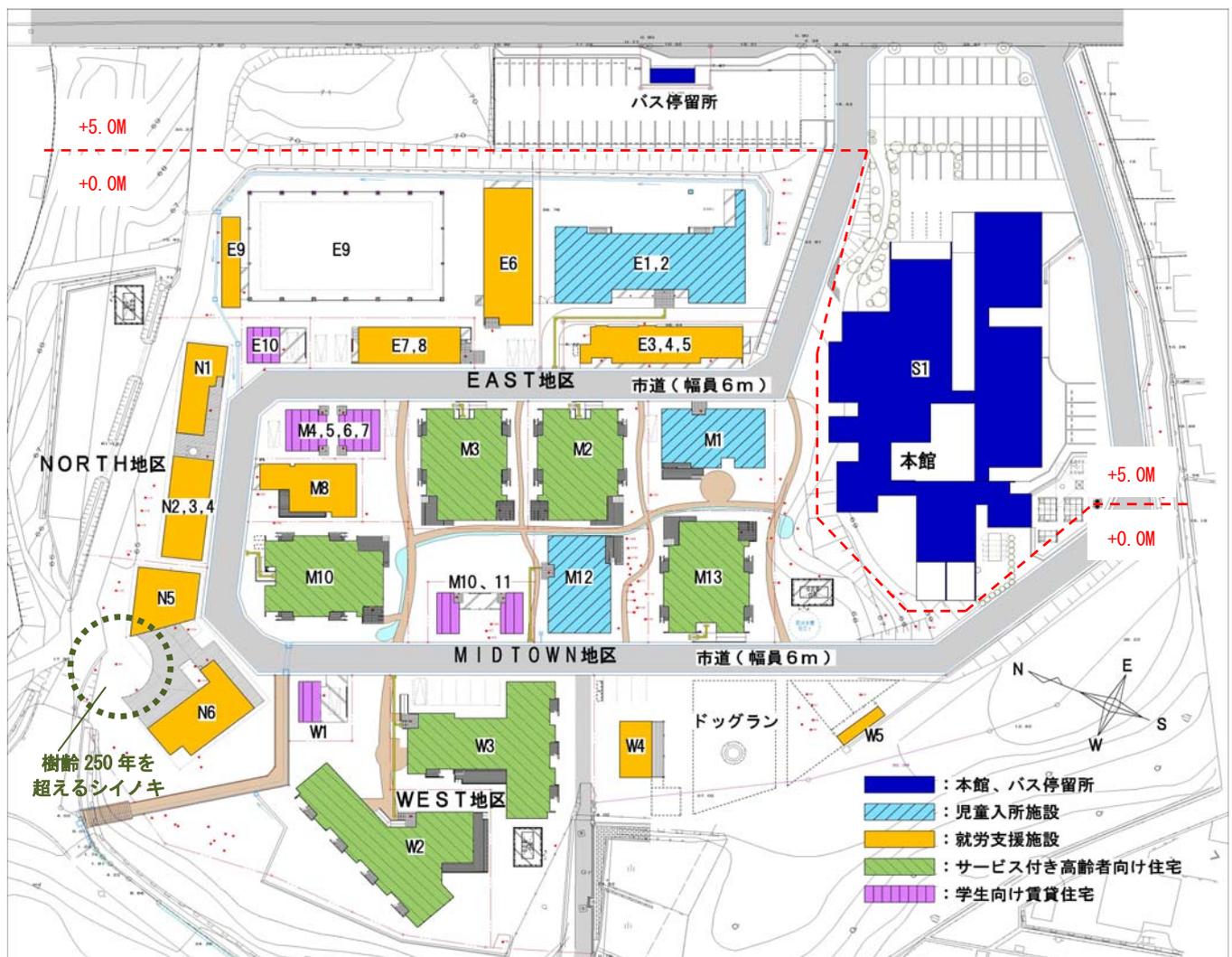


図1 全体配置図 約35,700㎡の敷地にU字型の市道を設け、障がい者、高齢者、学生、一般利用者の施設を混在させながら、分棟配置している。図中の棟番号の建物用途は図2に記載（資料提供：株式会社五井建築研究所）

Share 金沢の清水愛美施設長は語る。その幾つもの要望の中にドッグランとバス停がある。我々設計者は周辺の地域住民がペットを連れて散歩に訪れることができるよう、敷地内市道に面した既存樹木が背景に残る広かれた場所にドッグランを設けた。またバス停は乗降の安全面に配慮して敷地内に引込み、雨雪の多い地域に配慮して屋根付きのデザインを提案し、地域の要望に応じている。

3. 全体計画

3-1. Share 金沢の概要

本章では建築計画全体について記述する。Share 金沢は障がい者施設、高齢者施設、健常者の施設など計 25 棟の建物を敷地全体にランダムに分棟配置し、障がい者を含め、学生から高齢者まで生活を共にする街である。あらゆる人が分け隔てなく、触れ合う環境が備えられている「ごちゃまぜ」を街づくりのコンセプトとし、敷地全体を使って平屋もしくは 2 階建ての建物を主体とし、自然環境を生かしたヒューマンスケールの街を計画した。

3-2. 街全体が就労支援施設

計画地の用途地域は第一種低層住居専用地域である。低層住宅のための良好な住居の環境を保護することを目的とした地域であり、店舗や飲食店には一定の制限がわかり、運動施設などは建築が出来ない。しかしながら、この街の施設全体を障がい者就労支援施設として位置付け、建築計画を実現している。障がい者の就労とは具体的には本館の厨房・配食キッチンでの調理・接客や各店舗での接客・清掃の他、街全体の清掃やアルパカの飼育、農園活動などが挙げられる。

分類	主用途	棟番号
福祉系	高齢者デイサービス	S1(本館)
	知的障がい児入所施設	E1.2.M1.M12
	児童発達支援センター	E6
	児童発達支援センター指導訓練室	E6.E9
	放課後等デイサービス	E6
	学童保育	E7.8.M8
	障がい者就労支援施設(配食・食事)	S1(本館)
	障がい者就労支援施設(訓練・洗濯作業室)	E3.4.5
	障がい者就労支援施設(授産製品ショップ)	N1.2
	障がい者就労支援施設(技術・マナー講義)	N3.4
	障がい者就労支援施設(授産カフェ)	N5
	障がい者就労支援施設(授産料理教室)	N6
	障がい者就労支援施設(ログハウス)	W4
障がい者就労支援施設(畜舎)	W5	
住居系	アトリエ付賃貸住宅	E10.W1
	賃貸住宅(2世帯)	M10.11
	賃貸住宅(4世帯)	M4.5.6.7
	サ高住(平屋建て)	M2.M3.M9.M13
	サ高住(2階建て)	W2.W3
一般	公衆浴場	S1(本館)
	バス停留所	

図2 建物用途一覧表(公衆浴場、バス停を除いて、福祉系と住居系用途で構成される)

3-3. あるものを活かした配置計画

廃院から6年経過した計画地は管理されないまま放置され、背丈ほどの下草が伸び放題の荒れた状況であった。病棟は既に解体されていたが、周辺の樹木は残され、病棟間のヒマラヤスギなどの中高木が敷地中央に三列の帯状に育っていた。

我々設計者は敷地周辺の雑木林を含め、この自然環境を出来るだけ残すことが配置計画の大きなポイントと捉え、全体の配置計画を進めた。また敷地の南東側は約5m程度の高台となっている敷地特性を活かすことも同時に進められた。配慮された点は以下の3点に要約される。

- ①大規模で象徴的な施設づくりではなく、敷地全体を用いてヒューマンスケールな街を創出。
- ②求められる機能は機能別配置によらず、建物の規模や形態に応じて敷地全体に配置。
- ③既存の緑と新しい緑が調和した自然豊かな環境を創り、人々が触れあう場の設定を重視。



図3 左は着工前の敷地写真(中央に中高木が残る) 右は現在の敷地写真を示す(中央の樹木を残した配置)

3-4. 計画の変遷

3-4-1. パタン・ランゲージの応用

前項では配置計画の方針について整理を行ったが、そこに至るまでの過程は容易ではなかった。単に複合用途の施設の集積である街を作るのではなく、地域の中で多世代交流を具体的に促し、共に暮らすコミュニティ空間を作ることを目指す佛子園にとって、我々が提示する40以上の計画案は建築空間の提示にとどまり、十分なものではなかった。事業主と設計者と著者山崎亮との鼎談集「ケアするまちのデザイン」⁴⁾の中で、雄谷良成理事長は我々との打合せについて以下のように振り返っている。「はっきり言って、僕は建築なんかどうでもいいと思っている。人はどうやって出会い、コミュニケーションするという視点がほしいと伝えた」また建築好きと周囲から評される雄谷氏が打合せに書籍「パタン・ランゲージ」⁵⁾を持参し「ここにある要素を取り入れたい」と発言されたとある。我々はこれらの発言は街の中心は建物ではなく、人であると理解し、考えを改めるきっかけとなった。

パタン・ランゲージは1977年（昭和52年）にクリストファー・アレグザンダーが提唱した建築・都市計画に関わる理論である。人々が心地よいと感じる環境（都市・建築物）を分析し、253のパタンにまとめている。パタンの中には「小さな人だまり」「池と小川」「聖域」「小さな駐車場」「通り抜け街路」「街路への開口」「街路を見下ろすバルコニー」「どこでも老人」「仕事コミュニティ」など、本計画に取り入れられたものも多く見られる。

計画当初、我々は計画全体の枠組みを取り決め、それぞれの建物や外部空間を機能別にどの様に集合・配置するかという設計方針を取っていたが、改めて人々が心地良いと感じて集まる場、人と人がコミュニケーションを取る場面をどの様に創るかを考えた。その結果、日常生活の中で住まい手が望ましいと思われる空間やコミュニケーションを取るシーンをイメージし、それらを積み重ねて全体を構成するという設計方針へ転換を図った。このことは機能化・効率化を求めた日本の都市計画に対して、ジェーン・ジェイコブズが「アメリカ大都市の生と死」⁶⁾で提唱した複雑化を実践したとも言える。都市が魅力的で活力ある場として機能するために必要な要素として「地域が複数の機能をもつこと」「街区が短いこと」「古さや条件が異なる建物が混在していること」「十分な密度で人がいること」を指摘しており、具体的に街路などの事例にも触れている。

Share 金沢で具体的なシーンの一つは歩行者路やデッキテラスにも見られる。U字型に引き込んだ市道とは別に、その内周側をはしご状に横断し、建物間を結ぶ歩行者路を設けている。人ひとりが歩けられる程の舗装幅とし、反対側から歩いてくる人がいればお互い道を譲ったり、あいさつしたりするなどコミュニケーションを交わす場所となっている。また内周側にあるサ高住や児童入所施設は共用リビングに設けたデッキテラスを歩行者路の辻に向けている。リビングから外を見ると、歩いている人の姿が見えることで、日常的に人とのつながりを感じる事ができる。このような小さな設計の積み重ねがShare 金沢の設計の特徴と言える。

こうした設計方針の変更を行った後に、現在の配置計画をまとめるまでに時間はかからなかった。事業主の数多くの要望を出来るだけ具体的に実現する為に、それぞれの課題に対して、常にどの様にすれば人との交流が生まれるかを判断基準としたことが、結果的に事業主の要望に応えることが出来、以来良好な関係を築くことができたのでは無いかと考える。

3-4-2. 計画の変遷

本計画の立案にあたり、40以上の配置計画案が検討された。計画は大きく分けて6つの段階で変遷が見られた。以下、配置計画に見る計画の変遷をまとめる。

（第1段階）敷地全体に建物を分棟配置。南側の高台に本館、道路側に駐車場を配置している。計画当初より必要とする規模、用途はほとんど変わっていない。またこの段階では既存樹木の位置は反映されていない。



図4-1 第1段階配置図。計画の第一案。2011年3月22日、打合資料。

（第2段階）南東側に本館、北西側に運動施設を配し、その間に軸線を意識した歩道を設置。既存樹木の位置を確認しながら計画を行った。



図4-2 第2段階配置図。2011年4月20日、打合資料。

（第3段階）ごちゃまぜを象徴する建物として、本館は円筒型のシンボリックな形態で検討された。我々はこの形態を残しながら、軸線を放射状に設けたり、円筒型の本館に大きなデッキテラスを設けるなど幾つものバリエーションを提示するが、どの案も施主の反応は悪かった。この後、先述した雄谷氏の発言があり、我々が街の中心は建物ではなく、人であり、シンボリックな建物は必要ではないと感じ、計画を改めるきっかけとなった案である。



図 4-3 第 3 段階配置図。2011 年 5 月 8 日打合資料。

(第 4 段階) ごちゃまぜの本質を理解し始め、福祉系、住居系の建物をそれぞれ分けるのではなく、歩行者路、緑地を介しながらそれぞれの繋がり、関係性を考慮した。



図 4-4 第 4 段階配置図。2011 年 9 月 19 日、打合資料。

また全体の計画を一団地認定ではなく、敷地を分筆する方針とした。一団地認定では建物を耐火建築物とする必要があり、我々はこの計画にふさわしい建物は木造のスケール感であると判断し、その結果、用途、規模、コスト面においても適切な計画となった。



図 4-5 2011 年 10 月 17 日、打合資料。

(第 5 段階) 第 4 段階を経て、行政との協議の中、敷地内に幅員 6 m の市道を設ける条件が加えられ、現在の計画に近い U 字型の市道が検討された。その条件を元に再度配置計画を見直している。



図 4-6 第 5 段階配置図。2011 年 11 月 14 日、打合資料。

(最終段階) ドッグランなどこの街に必要な屋外要素を最終的に見直し、建物の整理を行った。同色の建物がそれぞれの同じ用途の建物を示し、敷地内にランダムに分棟配置されている。

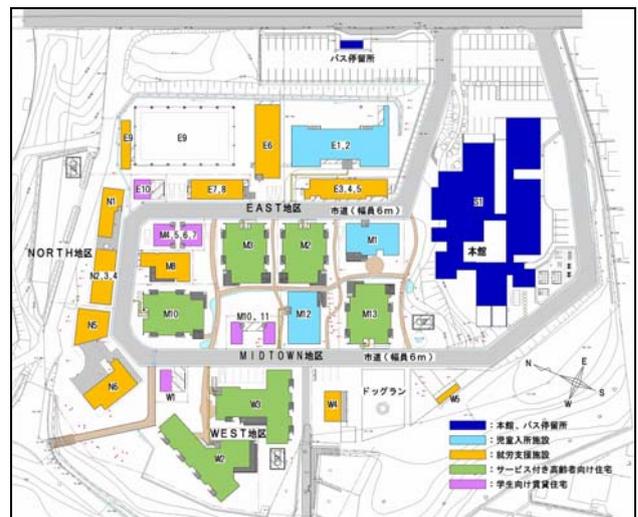


図 4-7 最終配置図 (図 4-1 から 4-7 まで資料提供: (株)五井建築研究所)

3-4-3. 実施設計後の変更

着工された後も計画には幾つもの変更が生じた。これは設計期間の多くを配置計画に費やし、各建物の詳細について具体的なシーンを深くイメージしながら各担当者が設計をする意識が低かったことが要因だったと考える。我々はそれらの変更についても、事業主の要望の有無に関わらず、積極的に提案し行った。その一つがエンノキ(榎)の保存である。敷地内に引込んだ市道の法面に樹高 20m を超えるエンノキが干渉し、伐採することが検討

された。しかしながら我々は既存の樹木を出来るだけ残しながら計画を行うことを優先させ、石垣による法面を新たに設けることでエンノキを保存している。



図5 市道の右側の石垣によって保存されたエンノキと左側の既存雑木林によって作られる緑のアーチ。

3-5. 全体計画の整理

我々設計者はごちゃまぜによる地域を含めた街づくりを実現する為、パタン・ランゲージの考え方を取り入れ、現在ある 25 棟の建築とそれら周辺環境を整備する計画をまとめた。各建物の詳細については次章で述べるが、ここでは全体計画について記す。

①平屋建ての建築を主体とした極めてヒューマンなスケールを持つ街とした。この中で特に大きなボリュームとなる全天候型屋外運動場は北側にある既存雑木林を背景に、通りからは奥まって目立たないよう配置した。

②敷地内には市道を導入し、各施設毎の敷地を設定した。

(幅員 6m U 字形の車道。建設後、市へ移管された)



図6 本館上部から街を見下ろす。U字型の市道に沿って建物が計画された。敷地周囲には雑木林、中央には中高木が残る。右奥には全天候型屋外運動場が見える。

③市道とは別に、通り抜けのできる歩行者路を市道の内側に形成した。またこの歩行者路に沿って井戸水を利用した小川をつくり、緑と水の豊かな環境を形成した。

④出来る限り既存の緑を残し、それに加えて新しい緑を

設えた。特に歩行者専用路に沿って多く配した。



図7 既存の樹木が残る敷地内に歩行者路を計画した。

⑤推定樹齢 250 年を超えるシイノキは施設配置の上で重要な要素と配慮し、シイノキを取り囲むようにカフェとクッキングスタジオを配した。

⑥この街で比較的規模の大きな 2 階建ての建築は街並みに配慮し、敷地全体に平屋建てと混在させた。

⑦バス停留所や歩道を幹線道路沿いの敷地内に設置し、周辺地域への貢献を意図した。

⑧サイン計画は内外ともに必要最小限にとどめ、かつ出来るだけ簡素化し、福祉施設らしさを排除した。

⑨建物の外装は質感と存在感のある材料を選定することとした。無垢の木材やアルミ亜鉛メッキ鋼板(以下、GL 鋼板)のスパンドレルを多用した。

⑩積雪に配慮し、勾配屋根を持つ低層で簡素な形態を取り入れた。また単調な街並みにならないよう、通りに対して妻入り、平入りを混在させ、また機能的に必要とされるトップライトを設置し、景観に変化を与えた。



図8 市道に対して平入り、妻入り屋根の建物が混在する。

4. 各建物の計画

4-1. 本館

本館は街を見渡すように南東の高台に立地し、木造 2

階建て、延べ床面積 1500 m² を超える複合施設である。高齢者デイサービス（以下、高齢者デイ）、配食センターなどの福祉サービスの他、温泉、食事処、ギャラリー、職員室などを併設する。



図9 通りの風景が一望できる本館ラウンジを計画した。

中庭を囲うように北側に配食センター・食事処・ギャラリー、南側に高齢者デイ・事務所、西側に温泉と分節し、渡り廊下で結びながら敷地内で最も大きな建物のボリューム感を軽減している。渡り廊下部分是一部鉄筋コンクリート造で計画し、その部分で異種用途区画を兼ねて面積区画を形成している。またそれぞれのボリュームに応じて、外壁は杉板の縦羽目板張り、GL 鋼板を採用し、大きく軒を出した緩やかな屋根によって、伸びやかな形態を取っている。内部の床は厚さ 30mm の杉無垢板を採用し、厚板が持つ保温効果によって、素足でも柔らかくぬくもりが感じられる。その他、傾斜する天井面や浴室、脱衣室の壁、天井にも無垢板を採用するなど、全体的に木の持つ温かみを感じられる設えとしている。

この街の住民以外の地域住民が集まりやすくする為、誰もが利用できる温泉・食事処や野菜の直売所を設置している。温泉は町会の住民は無料で温泉を利用できるなどの仕組みもある。また野菜直売所は地域の住民が登録し、自分が育てた朝採れの野菜を並べることができる。



図10 野菜直売所から食事処を見る。スギの柔らかさ、保温性を活かした床材など、無垢板を適材適所で採用した。

また中庭に面する多目的室は高齢者デイの談話室にあたり、一般利用者の動線に隣接して配置されている。障がい者と高齢者が一般利用者と区分けしないごちゃまぜの考えがこちらでも見られる。しかしながら、当初はこうした配置計画は従来の縦割り型福祉では認められないという現実があった。計画概要を市の担当者に伝えた所、「障がい者用と高齢者用と2つの廊下をつくるように指導を受けた」と佛子園職員は振り返る。施設整備の補助金の出処と金額の相違がこうした指導の背景にあったのだが、障がい者も高齢者も健常者も混在させようとするごちゃまぜのコンセプトに理解を示すには多くの時間を要し、許認可権を持つ諸官庁との紆余曲折の折衝を経て認められた。縦割り型福祉の弊害と言えよう。



図11 左は多目的室。高齢者デイの談話室でもあり、温泉や食事処を利用する一般利用者のスペースでもある。

4-2. カフェ・クッキングスタジオ

カフェ・クッキングスタジオは樹齢 250 年を超えるシイノキを囲うように立地する木造平屋建てである。東西にカフェとクッキングスタジオが配され、その間を大きな屋根とデッキテラスが結ぶ。木製の建具でデッキテラスとつながる内部空間は床面、天井面にも木材を多用し、周囲の環境と連続するような雰囲気形成する。

日中はビンテージの家具でゆったり時間を過ごす人や開放的な空間で料理を習うサ高住の住民、幼稚園児のお散歩コースとなって、デッキテラスでお弁当を広げる風景などが見られる。また夜はライブカフェと様相が変わり、定期的に行われる JAZZ は市内外のファンも多い。更にデッキテラスには船舶照明の明かりが灯り、シイノキがライトアップされ、厳かな雰囲気が醸し出される。



図 12 シイノキを囲うように配置されたカフェとッキングスタジオのデッキテラスを設けた。

4-3. サービス付き高齢者向け賃貸住宅（以下、サ高住）

サ高住は敷地内に4世帯／1ユニットの木造平屋建てが4棟、8世帯／1ユニットの2階建てが2棟計画され、32世帯の高齢者が暮らす。それぞれの建物では共用玄関とキッチン付の共用リビングを配し、各住戸はミニキッチン付のリビングダイニングと3帖程度の納戸に隣接した寝室、脱衣洗面を兼ねたWCとユニットバスを備える。共用リビングと各住戸リビングの外部にはデッキテラスを設け、緑豊かな環境を内部にも取り込む配慮を行っている。また勾配天井を活かした内部空間の広がりとの木の温かみを感じる内装としている。

入居者それぞれが程良い距離感を保ちながら、日常生活の中で人と関わる事ができるよう、玄関から各住戸までの動線上に共用リビングを配置している。



図 14 各住戸のリビング。勾配屋根を支える母屋を現し、掃出し窓の外にはデッキテラスを設け、内部空間の広がり意識した。

4-4. 児童入所施設（幼児・重度棟、自立棟、自閉棟）

児童入所施設は幼児・重度棟（定員 幼児8名、重度8名、成人4名、短期入所2名）、自立棟（定員8名）、自閉棟（定員8名）の3棟が計画された。それぞれは一箇所にとどめず、街の中に分散して配置している。

ボリュームの大きい鉄骨造2階建ての幼児・重度棟は

ランドリーの後ろに通りから離れて立地し、その東側に既存の擁壁を利用した囲われた屋外スペースを設けている。1階中央に厨房を備え、両側に幼児と成人とのそれぞれのリビングを配している。

木造2階建ての自立棟、自閉棟は街の中心に配置。歩行者路やサ高住の共用リビングに向かって、リビングのデッキテラスを設け、外部との関わりを緩やかにもつ。内装はサ高住と同様、住宅を意識した木の温かみと内部空間の広がりを感じる内部空間としている。



図 15 共用リビング。開口部の向こうにはデッキテラスを介して、サ高住のリビングが見える。

4-5. 学生住宅

学生住宅はアトリエ付住宅を2棟、長屋形式の木造平屋建てを2棟計画している。アトリエ付住宅は近傍にある公立大学法人金沢美術工芸大学の学生が入居することを想定し、木造平屋建てのアトリエと住居として使用するトレーラーハウスで構成される。アトリエは創作活動の場として利用できるような天井が高いワンルームで計画を行った。学生はこの街に貢献できることを30時間以上活動することを約束する。その活動は様々で、高齢者デイに通う高齢者と一緒にお風呂に入って食事を取ったり、児童の面倒をみるなど、それぞれの創意工夫が見られる。



図 16 アトリエ付住宅はトレーラーハウスに住まい、建物内で美大学生がアトリエとして創作活動を行う。



図17 2世帯分の学生住宅。中央に既存の樹木を残し、2棟の間を玄関ポーチを兼ねた外部空間で結んだ。

4-6. 児童発達支援センター（全天候型屋外運動場）

全天候型屋外運動場はフットサルコート1面分の広さを持つ鉄骨造平屋建てとしている。児童発達支援センターと連携して、この街で生活する障がいをもった児童だけではなく、広く一般児童を受け入れている。夏休みには周辺地域の児童も集まって、街の住民である高齢者、児童と一緒にラジオ体操を行う風景が定着している。



図18 この街に住む障がい児の利用だけでなく、高齢者や地域住民と一緒に多用途に使用している。

4-7. 多世代交流を促すコミュニティ空間

この街の生活に潤いをもたらす、多世代交流を促す為に様々な施設がこの街に計画されている。サ高住の入居者や学生が中心となって運営する若松共同売店もその一つである。佛子園は黒子に徹し、仕入れから販売までを高齢者や学生が行う。まさに「私がつくる街」の実践と言える。我々設計者は日常的にこの街に住む高齢者が利用しやすいように、通りに対して開かれた井戸端会議ができるスペースをレジの横に設けた。ここではこの街の日常的な情報や地域の新着情報を掲示する大きな黒板とテーブル、椅子が用意され、高齢者や学生、学童に通う子どもや地域住民が集まって語らう光景が見られる。

また地域住民がこの街に関わりを持てるようにマッサ



図19 共同売店を利用する高齢者。自分たちの必要な日用品を自分たちで仕入れ、自分たちで販売を行う。

ージ店やクリーニング店、大型犬が遊べるドッグランやアルパカ牧場など、個性豊かなコミュニティ空間を形成している。



図20 地元の要望を反映して計画されたドッグランは遠方からの利用も見られる。

5. 終章

5-1. 社会的評価と課題

Share 金沢は2014年にGOODDESIGN賞、中部建築賞一般部門特別賞、2015年に医療福祉建築賞準賞、日事連建築賞優秀賞などを受賞した。医療福祉建築賞の選評では以下のように記されている。『「シェア」(share)するとは、責任も共有・負担しあうことである。誰もが主体的に生きる一人の生活者としての姿を求めながら、新しい街づくりとコミュニティーの創造という理想を形として結実させた意欲的な作品である。サービス付き高齢者向け住宅、児童入所施設、高齢者デイサービスなどのほか就労支援の場も併設し、さらに地域・一般の人々を取り込む機能と場を計画することで、お互いが自立しながらもつながり、支え合うことで成立する「ごちゃまぜ」の世界を創出した。(中略)街の声を拾い、必要な人材や組織を発掘していく取り組み、内外の人を惹きつける魅力

的なアクティビティの創出など、丁寧で緻密な戦略によりこの街は創りだされた。属性、世代、機能、配置の「ごちゃまぜ」の理想実現に建築も応え、統一感のある街並み形成に成功した。これからの時代における居住や街のあり方に大きな示唆を与える魅力的な取組みである。』

そうした過大な評価を頂いた一方で、我々設計者は本計画は作り込み過ぎたのではないか、あるいは余剰地をもっと取るべきだったのではないかと考えている。設計当時からのプログラムに大きな変化は無いものの、周辺地域の児童数の変化により学童保育の要望が大きく増えている。街開きより2年経過した2016年度より、金沢市からの受託児童数を40名から90名に増加した結果、当初バリアフリー住宅として整備した住宅を学童保育として使用することになった。このように「ごちゃまぜ」の理念に基づき、成長続ける街には社会のニーズの変化や新しい機能が付加された場合に対して、建物や土地の継続可能な対応や仕組みが必要ではないかと考えている。

5-2. 開設後の地域との関わり

2014年（平成26年）に街開きを迎えたShare金沢は街づくりの運営に関わる住民として、障がい児や高齢者、学生や学童の児童、一般の利用者が互いに交流のある街として全国からの注目を集めている。開設初年度には約20万人の視察者があり、5年が経過した現在でも全国からの視察者は多いと佛子園職員は語る。こうしてShare金沢は福祉やまちづくりの分野では知られることになったが、金沢市民にとっての認知度は高くはなく、地域住民との交流、コミュニティの醸成はまだ途中と言える。その理由として計画地は周囲を雑木林で囲まれ、幹線道路から離れた立地環境の影響にもある。敷地内を見れば物理的にも精神的にもオープンな環境を作り上げているが、立地条件による閉鎖感や周辺との距離感が、この街の住民やこの街に関わることのない人からすれば、閉ざされた特殊な環境に感じられてしまうことが要因の一つと考えられる。また佛子園との縁の無い土地であったこともあげられる。計画当初より佛子園職員が地域の要望を丁寧に拾い、我々がそれらを計画に反映するなどの取り組みを行ってきたが、地域住民の繋がりから更に外部との交流への広がり求められている。

我々がShare金沢以降も佛子園と更に取り組んだ2016年（平成28年）にオープンしたB's行善寺（佛子園法人本部）や2018年（平成30年）にオープンした輪島KABULET（佛子園、公益社団法人青年海外協力協会、輪島市が連携して進める福祉を核とした街づくり）の地域交

流の広がり比べてみても、その差は感じられる。

一方で喜ばしい報告もある。周辺の小学校では社会科授業の一環でShare金沢が取り上げられ、児童が職員にヒアリングし、授業で発表することが毎年恒例となっている。また地区の町会ではShare金沢の年末大掃除が年間行事予定に組み込まれ、地域住民の自発的な参加も増えており、少しずつではあるが確実に地域交流は広がっている。

5-3. 設計者の思い

このプロジェクトの設計段階初期において我々は佛子園のいう「ごちゃまぜ」理念への理解度は浅かった。40を超える計画案を作成していく中で徐々に理解度が深まった。特に建築の考え方において我々がどこかで象徴的な建築を指向する傾向にあったが、そもそも人とひとのコミュニケーションを創る場として象徴的な空間は意味をなさないと考えるようになった。佛子園は仏教用語「三草二木」という考え方を理念の根本に据えている。これは生きとし生けるもの全てに違いがあるものの等しい価値があるという考え方で「ごちゃまぜ」の基になる言葉である。等しい価値を持つもの同士が共存し刺激しあう環境を創ることで前向きに生きようとする心が醸成されるという「ごちゃまぜ」の真の意味するところを「三草二木」という言葉により初めて理解することが出来たように思う。それまでに提案していた樹齢を重ねる樹木を象徴的に扱う案や、円形の強い形を持った象徴的な建築案が消え去りクリストファー・アレクサンダーのいう「人びとが心地よいと感じる」生活シーンをつなげていく手法にたどりついた。

オープンして6年目を迎え、設計当時からのプログラムに大きな変化はない。前述したように今後社会のニーズに応じて新しい機能が付加されたり、周辺地域の変化によりシェア金沢の街は変化を続けるであろうが、「三草二木」の精神は変わりなく生き続けると思う。そんな街を設計者として今後も見守り続けたい。

参考文献

- 1) 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局、「生涯活躍のまち」構想に関する手引き（第2版）平成27年12月
- 2) 雄谷良成監修「ソーシャルイノベーション」（ダイヤモンド社、2018年9月）
- 3) 厚生労働省、「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会」報告書、平成12年12月8日
- 4) Share金沢トップページ、Share金沢HP
<http://www.bussien.com/info/history.htm>（参照2019-06-29）
- 4) 山崎亮著「ケアするまちのデザイン」（医学書院、2019年4月）
- 5) クリストファー・アレクサンダーほか著「パタン・ランゲージ」（日本語版、鹿島出版会、1994年）
- 6) ジェーン・ジェイコブズ著「アメリカ大都市の生と死」（1977年1月、SD選書118、鹿島出版会）